
壊れた二人

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた二人

【Nコード】

N8661D

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

僕は彼女の事をとて愛していたんだ。大切に思っていたんだ。代わりがないとわかっていたんだ。それなのに、どうして僕は望んでしまったのだろう。

爽やかな風が吹く丘の上。辺りには名もなき花達が咲き乱れていた。

暖かい太陽の光に満ち溢れた世界。

赤や黄色に、紫に青。淡い色が散りばめられている。

君と僕のお気に入りだった場所。君はゆったりと座っているね。

とても幸せそうな表情で微笑む君。それを見つめているだけの僕。

ああ――これはいつの記憶なのだろう。

「ねえ、私と会った時の事……覚えている？」

君が花飾りを作りながら歌うように話す。

もちろん覚えているよ。僕が忘れるわけじゃないか。とても大切なことだよ。

初めて眼にした君は、とてもきらきらと輝いていて。

僕の眼が潰れてしまうのじゃないかと思うほど。すごく眩しかったんだよ。

ありふれた言い方だけど、太陽みたいだったんだよ。

艶に満ちた栗色の髪が、風に吹かれて舞い上がる。

それを優しく抑えるやわらかな手。触れると、そっと暖かいのだろう。

親鳥の羽根の中のように。

裾が広めのワンピースがゆらりとなびく。

君は学校の制服も似合っていたね。

どうして君は学校なんかに来ていたんだろうね。何故学ぶという事をしていたのだろうね。

君はただ、そこに居るだけでよかったのに。

「愛しているわ」

最愛の君からの、最高に嬉しい言葉。花飾りもくれるのかい？嬉しいな。

でもね、何故なんだろうね。

僕は、とても君を愛しているのに、何よりも大切だと思っているのに。

代わりなんていないと思っているのに。

時折――壊してしまいたくなるんだ。

水面に浮かぶさざ波のように、一瞬浮かんでは消えてく。

湧き立つ泡に混じるのは……憎悪？

緩やかに忍び寄るそれは、少しずつ、けれども確実に僕を蝕んでいくんだ。

酸化していく鉄のように。

岩を削る滴のように。

ほんとうにすこしずつ……僕が、変化していく。

おかしいね。きみようだね。どうしてなの。

どうして、愛しい者を壊したいなんて考えてしまうんだろう。

代わりのない者を壊すなんて、それがどういう意味か分かってるの？

もう二度と会えなくなってしまうんだよ……それでも。

それでも、僕は望んでいるのだろうか。

花をクルクルと弄んでいる君は、何を望んでいるんだろう。

今の僕には……分からない。

綺麗な君を見ているのに、僕はとてもいけない事を考えてしまうんだ。

君の血は、とっても綺麗な紅色をしていて、とても甘いんだろうなって。

折れ曲がった身体も、美しいのだろうな、とか

何があっても、君はふわりと笑っているんだろうなって。

どんな事も、笑顔で受け入れてくれるんだろうなって。

君は……優しい人だから。

その君の優しさが――僕を蝕んでいくんだ。

無意識の内に侵されていく恐怖。

大切な者を失ってしまうのではないかという不安。

とても大好きなのに、君がもたらすのはマイナスばかりだ。

でもね……君だって悪いんだよ？

その穏やかな表情で、他の男に微笑みかけるから。

その茶色い瞳で、他の男を熱っぽく見つめるんだもの。

その暖かく柔らかな手で、無邪気にじゃれあったりしてるんだから。

ああ……僕はそれが許せない。

君が笑いかけるとのならば仮面を被せてあげよう。

君が僕以外の誰かを見つめるのならば、その瞳はいらないね。

君が何にでも触れてしまうのならば……手足を切り落としてしまおうか？

小鳥が囀るように、よく動く口ならば……縫い付けてあげる。

真っ暗に開いた空洞の中で見るのは、記憶の中の僕。

仮面の中で思い出せるのは……きっと僕。

震えぬ喉で叫ぼうとするのは、僕の名前。

……ああ。どうしてこんなに僕は不安なんだろう。憎いのだろう。

愛しいのだろう。

矛盾する思考に、奔りだしそうになる衝動。

時を刻まぬ時計に……言うことを聞かない暴れ馬。

そして僕は制御する術を知らない。

このままなら……僕は、君を壊してしまうだろう。

君は、何を望む？

何を願う？

一体何を厭う？

お願いだから、それを僕に早く教えて欲しい。

そうじゃないと僕は……。

鉛のように重たい瞼を、無理やりこじ開ける。

ベッドから起きて、近くのテーブルに置いてあるペットボトルから水を飲んだ。

ひどく、喉が渴いて、ざらついていた。

あれは一体……いつの記憶だったんだろう。

あんな夢を見るなんて。これまで一度もなかったのに。

懐かしいような……逃げ出したいような。

郷愁と罪悪感？ いや、そんな生易しいものじゃないのはもう知ってるはずだ。

寝起きでぼんやりしている僕の耳に、いきなり甲高い声が飛び込んでくる。

ぼくはゆるりと首を向ける。

ベッドから少し離れた所のソファに座る物を。

ばさつき、痛んだうす茶色の髪。

結露した硝子のように曇ってしまった瞳。

彼女は、笑っていた。子供のように無邪気に。

ベッドから降りて、彼女の隣に腰を下ろす。そして顔を覗き込む。からからと無邪気に笑う声と、仮面のような無表情。

まるで、デスマスクをかぶっているみたいだね。

ほら、肌なんか消えてしまいそうなほど透き通って、うっすらと血管が透けているよ。

ねえ……君は何を望んでいたの？

どうして教えてくれなかったんだい。

君は……ずるいね。

僕は……どうして。

壊すということが、殺すという事だけではないと、知らなければよかったのに。

虚ろな僕の中で、ふつふつと泡のように浮かんでは消える感情。

君を、いつそ殺してしまえばよかった。そうすれば。

抜け殻しか残らなかったのに。

其処に在るだけでいい、なんてどうして願ったんだろう。

どうしてそれがいいと思ったのだろう。

ただ、其処に在るというだけ。それがどれだけ残酷な事か僕は知らなかったんだ。

在るだけ、というのは、消滅と存在の狭間で揺れている。

とても希薄で、どちらでもないんだ。生でもなく、死でもない。

有でもなく、無でもない。

陽炎みたいにゆらゆら揺れているだけ。

何故僕はうまく壊せなかったんだろう。

君に今宿っているものは何？

悲しみ、喜び、それとも……僕への憎しみ？あるいは、虚無？

その闇で、僕の事も飲み込んでくれたらいいのに。

君のそのばらばらの欠片を集めたら、また君に出会うことができる？

ぐずぐずに崩れてしまった思考を繋ぎ合わせて、自我をカタチ作って。

唇に朱を差して、頬を引き攣らせて。

寄せ集めの、継ぎ接ぎでも構わない。君に会うことができるのならば。

僕は、どうすればいい？

ねえ、お願いだから。

もう一度だけ、僕の為に笑ってよ。その柔らかな手で僕を抱きしめて。

壊れるくらいに強く。君になら、壊されてもいいから。

今度は僕もちゃんと壊れてあげるから。

君だけ、先にいかないで。僕を……置いていかないで。

ああ、僕は消えてしまえそう。

不思議だね、奇妙だね、何故だろうね。

僕は、僕がしたいことをしただけのはずなのに。

どうしてこんなにも悲しいのだろう。

僕は喜ばなくちゃ、嬉しくなきゃいけないのに。

望みが叶った時って、そうでしょう……？
でも、昔の望みと今の望みは噛み合わない。
壊したかったのに、会いたいなんて。

僕は何も分かっていなかったんじゃないか。
開け放した窓からは、生ぬるい風が吹き込んでくる。
視界の隅に、空の花瓶が映る。

君の眼は……何も見てないのかな。

僕が奪って、壊したから、何も残っていないんだよね。
遅すぎる後悔を繰り返す日々。僕はいつまでこうしていればいい
のだろう。

それとも、永遠にこうすることが、君への償いなのかな。
ふと、彼女が何か握り締めているのに気がついた。
拳をゆっくりとひらいて……そこにあったのは。

いつかの丘でみた、同じ形をした花飾り。

枯れかけた、しなびた花だったけれど。

ああ——君は。

僕は彼女の耳元でゆっくりと囁く。からっぽの君に、届くように。
虚無に吸い込まれず、君へちゃんと届くように。

「愛してるよ」

今なら、愛しいといえるよ。憎しみは……もう尽きてしまったか
ら。

それに、今なら分かる。もう、僕は壊れているんだよ。

花飾りが……とても綺麗だと思うなんて。しわくちゃでかさつい
ているのに。

僕が君を壊して——君が僕を壊すんだ。

乾いた花飾りを握りつぶす。

互いに壊れたのなら、また会えるだろうか？

たった一つの壊れた僕の望み。

壊れた花飾りと君に託そう。

(後書き)

お読みくださりありがとうございましたっ。

ホラーから離れてみました。あんまり変化ない気も？

切ない……んでしょうか。あまりよく解かりません。

感想などありましたら、お気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8661d/>

壊れた二人

2010年10月8日15時56分発行